
魔法少女リリカルなのは 神殺しの魔導師

白須

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 神殺しの魔導師

【Nコード】

N9794H

【作者名】

白須

【あらすじ】

昔ある神殺しの一族がいた。その一族は更なる力を得る為に異世界に行った。数百年後、一族の技を継承した少女と管理局に入った少女達は出会う。待ちつける運命に向かって・・・

プロローグ（前書き）

初投稿です。この小説にはお・り・が・みとF a t e s t a y
n i g h t、レンタルマガカ、ネギまの内容が後々含まれてきます。
それでも大丈夫だという方は読んでくれるとありがたいです。初心
者なので間違いも多くあると思います。おかしいと思う所をご指摘
してもらえると助かります。ではどうぞ

プロローグ

「私から授けるべき事は全て授けた」
床に臥した老婆が言う。

「私達の一族は代々ある神様を墮とす目的の為に強くなっていた。
そしてさらなる力を

手にする為に異世界の魔術師共の所に身を置き、技を磨いた。覚え
ておるな」

「はい」

障子の向こうより返事が返ってきた。

その返事を聞き老婆は再び話し出した。

「じゃが時がたつにつれてその目的は忘れられてゆき、今では表の
者共は誰一人として

この事は知らん。そしてまた裏の者達も少しずつ消えてゆき、今で
は私とおまえだけになってしまった……」
少し息を整えたあと再び話し出した。

「そしてもうすぐ私も死ぬ。そうすれば残るはおまえ一人だ。裏の
役目はもはや必要ない。

そして我々の目的ももはやその意味を失った。おまえがいつまでも
この家に縛られる必要は無い。ゆえにこれからはこの家も名も捨て
新たな人生を歩め。おまえにはそれだけの力がある」

老婆の声は次第に弱くなっていた。

「言うべきことは言った。私が死んだ後ぐらいは家のしきたりどう
りにしておくれ……」

ふう、さすがに疲れたな……少し眠らせてもらおうよ」

「ごゆるりとお休み下さい……お婆様」

「ああ、では達者での、さくら」

そして老婆は静かに瞼を閉じた。もう一生開かれること無く。

「包め」

障子越しからの声。

それとともに部屋が炎に包まれた。

「お婆様、名だけはもらっていきます。これは私という存在の証明なのですから」

炎は部屋の中以上には燃え移らなかつた。

まるでその部屋の中だけを浄化するように。

「それでは失礼します、お婆様」

そして声の主はその場を去つた。

新たな人生を歩む為に。

第1話：出会い

本局の廊下を5人の人物が歩いていった。

「皆が集まるのも久しぶりだよな」

そう言うのは現在管理局戦技教導官の高町なのである。

「そうだね。はやて、シグナム達は先に行ってるの？」

反応したのはフェイト・T・ハラウン。本局の執務官である。

「うん、シグナム達とは現地で合流することになったるんよ」

答えたのは八神はやて。本局の特別捜査官である。

「けど、今回は3人がいてくれたおかげで仕事がすぐに終わったよ」
そういうのはエイミイ・リミエツタ、現在管制司令の仕事を勤めている。

「まっただ、助かったよ」

そう言うのはクロノハラウン。次元航行隊提督の職務に就いている。

「おや、あなた方は」

5人で久しぶりの会話をしている所に不意に後ろから声がかかった。

「うん？ああ！久しぶりですね、天草隊長」

クロノが最初に反応した。

「あ、さくらちゃんだ、久しぶりだね、元気だった？」

エイミイも続いて反応した。

「お久しぶりですね、クロノ執務官・・・いえ、今は提督に昇進していたのですね。」

おめでとうございます」

話しかけた人物、天草さくらが答えた。

「ああ、ありがとう」

「エイミイも久しぶりですね。そちらも元気でしたか？」

「うん、それに今は昇進して管制司令なんだから」

「そうなのですか？それはおめでとうございます」

「クロノ、この人は？」

フェイトが後ろから聞いてきた。

「ああ、君達が知らないのも無理ないね。彼女は君達と会う前の任務で手伝ってくれたんだよ」

「天草さくらです。所属先は特務一課です」

「特務一課？」

なのはが聞いた。

「本来の任務は通常の武装隊では対処出来ない様な事件を引き受けています。しかし他の任務として地上本部、次元航行部隊、聖王教会などからの依頼を引き受けたり、管理局の不正などの取締りや監視もしています。ですので、どこにも所属していない独立部隊のよ
うなものです。」

「へーそうなんですか、あ、私達は」

はやてが自己紹介しようとした。すると

「存じております。高町なのはは戦技教導官、フェイト・T・ハラオ
ウン 執務官、八神はやて特別捜査官ですね」

と、さくらは言った。

3人は驚いた。

「私達会った事ありましたっけ？」

なのはが聞いた。

「いえ、面識は御座いません。ですが仕事上有名所の名前は全て憶えております」

「すごいですね」

執務官を勤めるフェイトは素直に尊敬した。

「ところで今日はこういった理由で本局に？任務ですか？」

クロノが聞いた。

「いえ、今日はレアスキルの登録とついでに新米部下の迎えをと」

「レアスキル？そんなもの前は・・・」

「はい、今までは使う場所もないと思いきや隠しておきました。

ですが最近使わねばならないと思うことが幾つかありました。です

ので大隊長に許可を貰い2つ登録してきました」

「2つも!?それはすごいな」

同じレアスキル持ちとしてはやては驚いた。

6人で話をしている時、

「あれ、隊長？」

と、声がかかってきた。

第二話に続く

設定 1

天草さくら

性別 / 女性

年齢 / 15

所属 / 時空管理局特殊行動部隊（特務一課）

役職・階級 / 特務一課第一小隊長

魔法術式 / ミッド式、ベルカ式

魔導師ランク / 総合SS1

使用デバイス / 村雨融合型デバイス

むらゆめ 村正インテリジェントデバイス

レアスキル / 妖精眼

グラムサイト Sch w ? r z e n S i e F l ? g e l （黒き翼）

黒髪の長髪を1つにまとめて結んでいる。瞳の色は黒。かなりの美少女だが、左目に妖精眼があるために眼帯をしている。天草家の裏側の最後の1人。厳しそうな印象を受けるが味方には優しい。だが、自分が敵と認識したものには容赦ない。今まで任務や修行の中で生きてきたので色恋沙汰などに疎い。天草の今までに集めた全ての技を黒き翼によって継承している。また武器のほとんどを使うことが出来る。レアスキルを使うことはほとんどない。基本的に自分に厳しく規律正しく生活しているが、朝は弱い。

バリアジャケットは黒い着物をまといその上に羽織を羽織っている。またそれぞれの戦闘にあわして別の姿がある。通常時は管理局服を着ている。

天草家について

祖先は第97管理外世界にいたが、ミッドの魔導師と出会い、新たな力を手に入れられる事を願う

一族ごとミッドチルダに移った。本来はある神を殺す為に作られた一族である。天草家は表の者達（以後表）とさくらが所属していた裏の者達（以後裏）に分かれている。表は天草の名家であり、主に管理局の重臣の護衛などを主な成り合いとしている。裏は表が取得出来る様な技の研究や危険な任務を引き受けている。このことを知っている表は当主を含め少ししかない。裏は表より危険な仕事をしているので多くが死に、又残ったさくらの祖母も死にさくら自身も抜けた事になっていたので事は実上裏は消滅したことになる。天草家は謎が多く管理局でも知られている事は少ない。

レアスキル Sch w? r zen Sie Fl? gel（黒き翼）
黒き翼は天草家が自ら1から作り出した禁術の1つである。過去に天草家が集めてきた術を記憶しており、その術を行使する事ができる。また記憶していない術でも妖精眼で解析しその場で術を取り込み使用する事が出来る。また、それ以外に本来の使い方がある様である。

第2話：怨念

「あれ、隊長じゃないですか」

後ろから声がかかってきた。

「ああ、クリスですか。任務は無事終わったようですね」

「ひどいつすよ、隊長。あんな『Aクラス以上の犯罪者5人を1人で捕縛せよ』なんて任務新米の俺にはきつすぎですよ」

クリスと呼ばれた男性が言った。

「あんな任務も1人で出来ないのでは特務の仕事は務まりませんよ」

「まあそれを言われたら終わりなんすけどね。ところで、隊長はどうしてこんな所に？」

もしかして迎えに来てくれたんですか？

「近くまで来たのでそのついでです」

「相変わらずのツンデレですね」

クリスは笑いながら言った。

「他の隊員も言いますが、そのツンデレとはなんですか？あなた方だけわかっているようで不愉快です」

さくらは少し不機嫌そうに言った。

「いや・・・たいした事じゃないですよ」

クリスは明後日の方向を向いた。

「誤魔化しましたね、まあいいでしょう」

「ところで隊長は誰と話し・・・」

クリスの視線がはやてに向いた瞬間、クリスの目つきが変わった。はやてはその目を知っていた。

それは闇の書の被害者達に謝罪をしに行った時と同じ目だった。

「なんでおまえがここにいる、闇の書主、八神はやて！」

「違う、はやてちゃんは」

なのはが咄嗟に否定しようとした。だが、

「何が違う！こいつが闇の書の守護騎士達と共にいてあいつらもこ

いつを主と認めている！これだけあって違つて違つたのか！」

クリスはまったく聞く気を持たなかった。

「シグナム達も過去の罪を悔いて今では人々の為に働いている！それに闇の書も今では夜天の書として」

フェイトも庇おうと前にでた。

「そんな事信用できるか！だいたいそれが真実だとして円く収まったとしても死んだ奴等は帰ってはこねえ！なのにおまえだけが家族を得るだど！？ふざけるな！」

クリスは今にもデバイスを出しそうだった。

危険だと判断したクロノが止めようとした瞬間、

「止めなさい、クリス」

そうさくらがクリスに言った。

第3話に続く

第3話：思い

「止めなさい、クリス」

そう、さくらが言った。

「止めないで下さい、隊長。こいつは」

「止めると言っているのですよ。聞こえないのですか？クリス・ロ
ーランド隊員」

空気が凍りついた。さくらの口調は変わらなかったが発せられている殺気は尋常なものではなかった。

「あなたが闇の書を恨む理由は知っています。ですが、闇の書事件は終了し、闇の書は

夜天の書と変わり、守護騎士達は管理局員として働き人々を救っています」

「けど、もし嘘をついていて管理局を裏切ろうとしていたらどうするんですか!？」

「はやてちゃん達がそんなことしな・・・」

なのはが反論しようとした。

「その時は我々が彼女達を殺します」
全員が驚いた目でさくらを見た。

「我々はそういう者達に対処する為にも存在しているのですよ。八神さん、私からも質問します。あなたは管理局を・・・いえ、あなたを信じている者達を裏切るつもりなのですか？」

さくらははやての方を向いて聞いた。

「そんな事絶対にせえへん！私は最初いつも独りぼっちだった。けど今では友達や恩人や家族がある。私はその人達を悲しませとうない！」

はやては自分の思いを言った。

「そう八神さんは言っています。八神さんがその様に思い、人々の為に働いていくというのなら、私は彼女を認めます。そしてその彼

女達を傷つけようというのなら私はその行いを止めましょう。例え闇の書の被害者達だとしても」

「!?!」

はやて達は驚いた。被害者達に味方する者は多くいたがその行動を止めるといふ者はほとんどいなかったからだ。

「ふう、このような所で話す話題ではないですね。クリスあなたは先に隊舎に帰って

大隊長に報告書を提出しておきなさい。私はまだ用事がありますので」

「ですが!?!」

「帰りなさい」

さくらは有無を言わず言った。

「・・・わかりました、先に隊舎に戻ります」

クリスはさくらやクロノに敬礼し、最後にもう一度はやてを睨んで去っていった。

「すみませんでした、皆さん。こちらの隊員が失礼な事を。責任は私がとりますので」

さくらは頭を下げた。

「いえ、この様な事どうしようとは思っていませんよ。それよりも彼は・・・」

クロノが代表して聞いた。

「はい、彼は守護騎士達によって彼自身と唯一の家族である姉のリンカーコアを抜かれ、それによって彼女の姉は蒐集に耐え切れずそのまま亡くなってしまいました」

「そうやったんですか」

はやては俯いた。

「ですが、彼は闇の書への復讐は諦めていました。それに彼は闇の書事件が終わった後

貴方達のことを調べていました。ですので、八神さんや守護騎士達がどのような思いで管理局の仕事に就いたかは実際のところわかっ

ていたのでしょうか」

「けど、それならどうしてあんな事を……」
「なのは聞いた。」

「きつと自分自身でも気持ちを抑えきれなかったのではないでしょうか。守護騎士達が過去の闇の書保持者達の命令の為にほぼ強制的に蒐集を行わされていたことも、また八神さんが悪くないのもわかっただけです。そして八神さんが闇の書の罪を償うと決めた事も知りませんでした。だからこそ彼も復讐を諦める決心が出来ました。ですが実際にあなた方に会って抑えつけていた気持ちが爆発してしまっただけです。」

「そうですか……」

「まあ本当の所は彼自身に聞かねば知りませんが……。ですが私としてもあなたの思いがきけてよかったです。」
「そうさくらが言った。」

「え、それってどういう……」

第4話に続く

第4話：覚悟

「え、それってどういう……」
はやてが聞いた。

「我々とて、何の情報も無く、貴方達の存在を容認していた訳ではありません。貴方方の事を監視し問題無と判断したのです」

「シグナム達に気付かれずにですか!？」
はやて達は驚いた。

「隠密任務は我々の任務の1つですので。それにこの隠密任務はハラウンさん貴方の時にも行ったのですよ」

「そうなんですか!？」
フェイトも驚いた。

「聞いてませんよ、その様な事は」
クロノは若干厳しい声で言った。

「特殊な任務ですので。それにこのような事になるのも当然です、御二人の場合は特に」

フェイトの表情が少し暗くなった。

「まあその話は別にして我々としては、貴方方が問題無しと判断しているのです。ですが管理局の上層部には未だに貴方方を危険視している者達も少なくはないのです」

「まあ、そうですね」

クロノは頷いた。

「そして実際に我々に内密に貴方方の暗殺を依頼してくる者もいました。大隊長が断りましたが」

「なんだと!？」

これにはクロノ以外も驚いた。

「あり得ない話ではないでしょう。実際に上層部の中にも闇の書の被害者達はいます。」

それは貴方方の方が知っているのでは？」

クロノ達は言葉に詰まった。グラム提督が実際にそうだったからだ。

「ですから、そういう依頼が来た時に断れるだけの理由が欲しいのです。あなたが我々が庇うにたる人かどうかをです。こればかりは資料だけでは不可能ですからね」

「それで天草さんはどう思っただんですか？」

「はやては心配気に聞いた。」

「先程のを聞いて貴方がどのような気持ちで今ここに立っているのか少しながら分かりました。問題ありません。暗殺任務が来ても全て断るように私から大隊長に進言しておきましょう」

さくらは答えた。

「そうですか、ありがとございます！」

「ですが、注意する事にこした事はありませんよ。自分自身にもです」

さくらは言った。

「どういう意味ですか？」

「はやては言われた事がよく分からなかったので聞いた。」

「あなたは贖罪の為にと言って生き急いでいる様子があります。それではいずれ身を滅ぼしますよ」

「けど、それぐらいしなれば・・・！」

「はやては反論しようとして言葉に詰まった。」

「頑張るのを止めると言っているではありません。ですがそのままだと自分だけでは無く周りも傷付けてしまうかもしれないですよ」
「はやては俯いた。」

「あなたの周りには友達もいるし家族もいるではないですか。頼るといふ事もまたあなたの義務だと思えますよ、八神さん」

「そうだよ、はやてちゃんは1人で頑張り過ぎだよ」
「なのはが言った。」

「シグナムも言ってたよ。たまには頼って欲しいって」
「フェイトも続いて言った。」

「2人も十分1人で頑張りすぎやと思うけどなあ」
はやてはぼそつと言った。

「その通りだな、君達も1人で背負い込み過ぎだ。たまには周りを頼れ」

クロノが2人を少し睨んだ。

「うっ、すみません」

2人はうなだれた。

「けど皆がそういうならもうちょっと頼ってみようかな。助言ありがとうございます、天草さん」

「いえ、こちらも勝手な事を言っすいませんでした。どうやら長く引き留めてしまった様ですね」

「いえ、そんな事は」

はやては首を振って否定した。

「そうですか、ありがとうございます。では、私はまだ用事が残っているのです、これで失礼します」

さくらは背を向けて歩いていった。

「なんか不思議な人だったね」

なのはが言った。

「うん、けどなんかかつこよかった」

フェイトも言った。

「うん、それに初めて会うのにあそこまではっきり言うってくれる人初めてや」

はやては少し嬉しそうに言った。

「なんか、憧れるなあ。出来る大人の女性で感じてなのはが言った。

「うん」

「そやね」

2人も頷いた。

「あゝ3人ともさくらちゃんの事幾つだと思ってるの?」
エイミィが面白そうに聞いた。

「私達より少しやろうか？」

なのはとフェイトも頷いた。

「は〜天草隊長は君達と同じ15歳だぞ」
クロノが言った。

「・・・え〜!?」

3人の声が管理局の廊下に響き渡った。

第5話に続く

第5話：隊舎にて 1

特務Side

なのは達と分かれた後さくらは残った用事をこなし、特務一課に戻っていた。

「あれ、隊長今お帰りですかい？」

後ろから声がかかってきた。

「ええ。そういうあなたはこのような所で油を売って何をしているのですか？クロウ隊員」

「いやいや、今まで一生懸命に第一小隊の為に働いていましたよ。だから息抜きとしてここでニコチンを摂取してるんですよ」
と、クロウが言った。

「はあ、そういう事にしておきましょう。ところで、クリスはもう帰ってきていますか？」

「ああ、あの新人りですか。帰ってきてますよ、えらく落ち込んでいましたがね。今は部屋にいるんじゃないですか」

さくらは溜め息をついた。

「そうですね、後で話す必要がありますね。ありがとうございます」

「おつ、隊長もしかしてあの新人りに恋でもしたんですかい」

クロウは身を乗り出して聞いた。

「そんな事あるわけないでしょう。いい歳してそのような事に一々反応しないで下さい」

クロウは溜め息をついた。

「隊長、年頃の少女が浮いた話の1つもなければダメですけど。それだけでなくとも仕事と修行が恋人というタイプなんすから」

「そういえば、クロウ最近個別での訓練をしていませんかでしたね。今度やりましょう。殺傷設定で」

「クロウ・ピアこれより仕事に復帰するので失礼しまっす！」

クロウは全速力で走り去って行った。

「はあ、あれで大隊長と同じぐらいの古株なのですから不思議ですね」

さくらはぼそつと呟いた。

その後さくらは上官の仕事部屋へと向かった。

「失礼します」

さくらは扉の前で言った。

「おう、入れ」

中から声が返ってきた。

「手続きは終わった様だな」

部屋の中の机に座っていた男が言った。

「はい、滞りなく終わりました。ゲルド大隊長」

「そうか、資料は後で提出しておいてくれ」

「了解しました」

「そういえば天草、お前の所の副官と一緒に連れて行ってくれなかったと言って落ち込んでいたぞ」

ゲルドは笑いながら言った。

「私がおらず副官もいないのでは小隊がまとまりませんので」

さくらは憮然として言った。

「相変わらずお前は冷静だな」

「そうでしょうか？」

さくらは少し首を傾けながら聞いた。

「知らぬは己だけってところだな」

ゲルドは呆れながら言った。

「そういえば、お前のところの新人、今回の任務大活躍だったらしいじゃないか。向こうの隊の隊長が褒めてたぞ」

「そうですか、私から見たらまだまだですが」

「おまえから見たらほとんどがそうだろうよ」

「そういえば大隊長、そのクリスマス隊員にも関係する事なのですが、お話したい事が」

さくらがクリスの話で思い出した様に言った。

「なんだ、言ってみろ」
ゲルドは言った。

第6話に続く

第6話：隊舎にて 2

「なんだ、言ってみろ」

ゲルドは言った。

「はい、本日本局の廊下で八神はやて特別捜査官に会いました」

「夜天の主か？」

ゲルドは聞いた。

「はい、それとフェイト・T・ハラウン執務官、高町なのは教導官、クロノ・ハラウン提督、エイミィ・リミエツタ管制司令も一緒でした」

「エリートの集まりだな」

ゲルドは苦笑した。

「全くですね。話は戻りますが丁度そこに任務を終えたクリス隊員と出会ってしまい、少々いざこざがありました」

「ああ、確かあいつは闇の書の・・・」

ゲルドは少し声をおとして言った。

「はい、そうです。まあその内容については後からクリス隊員と話すつもりですが、そこで八神はやての真意と思わしきものを聞く事が出来ました」

「ほう、それは興味深いな。俺も知りたかった。おまえから見てもうだった？」

ゲルドは少し身を乗り出して聞いてきた。

「少なくとも現時点では問題ないと思います。多少自己犠牲の感が強いようですが、そこは周りの人間がフォローするでしょう」

「ふむ、そうか。まあおまえが言うならそうなんだろう。わかった、八神はやてに関する暗殺任務などは全て断る様にしておこう。一応書類でまとめて提出しといてくれ」

「了解しました」

さくらは答えた。

「そうだ、俺からもおまえに話があるんだ」

ゲルドが言った。

「何でしょうか？」

「他の小隊長やおまえの代理としておまえの副官にはもう伝えただがな、先程特務2課からあるロストロギアについて報告があった」
「特務2課からですか？あそこから来るという事はそれ相応の内容の様ですね」

さくらは少し驚いた様子で聞いた。

「ああ、そうだ。そのロストロギアの名前は「レリック」というそうだ」

「「レリック」ですか。それが何か問題が？」

「それ自体にも問題はあるんだが今回話題にあがったのはその回収任務の時だ」

ゲルドはモニターをだした。

「本来レリックは2つの遺跡に分かれていた。その内の1つは回収出来たが謎の機械兵器の襲撃を受けた。またもう片方は謎の魔力暴走により遺跡は全壊。レリックも発見出来なかった」

「なるほど、レリックも気になりますがその機械兵器も気になりますね。ロストロギアを狙う技術者型の広域犯罪者の可能性がありませんね。その機械兵器の情報は何かあるのですか？」

さくらは聞いた。

「ああ、どうやらAMFを装備しているようだな」

「機械兵器がAMFを装備？かなり危険ですね、それは。ですがそれに瞬時に対応するとは有能な魔導師達のようなですね。どの隊ですか？」

「さつき話題にでたエリート達だよ」

ゲルドは答えた。

「なるほど、それでしたら対応できる理由も分かります」

さくらは納得した。

「依頼元は聖王教会のようだな」

ゲルドは付け足した。

「この様な話が来たという事は任務ですか？」

さくらは聞いた。

「ああ、だが今回は秘密裏に自分達だけで情報収集を行う。何かきな臭い気がするんだ」

「大隊長の勘は当たりますからね。了解しました。秘密裏に行く様にしておきます」

さくらは答えた。

「頼む、で、早速任務がある。といっても二週間後の事だし、情報も定かじゃあない。だがそれでもこのレリック関係だ。すまねえな」

「いえ、で、内容は？」

さくらは聞いた。

「ああ、二週間後臨海第8空港にレリックとおぼしき存在が確認される可能性が高いようだ。だからお前達第一小隊は当日その空港に行き、レリックの探索を頼む。またその関係者がいる場合は任意同行又は捕獲しろ」

「任務了解しました」

さくらは答えた。

「頼む。ああ、そういえば博士がお前を探していたぞ。デバイスの調整が終わったとかで」

ゲルドが言った。

「わかりました、今から行ってみます。それでは失礼します」

「ああ」

こうしてさくらは部屋を後にした。

第7話に続く

第7話：隊舎にて 3

さくらは隊舎内にある技術部の場所に行った。

そしてその内の1つの部屋の前に立った。

「清隆、入りますよ」

さくらはそう言って目の前の扉を開いた。

部屋の中は書類や機械などでごちゃごちゃになっていた。

その奥に椅子にもたれかけた1人の青年がいた。

「清隆、聞いているのですか？」

さくらが聞くが清隆と呼ばれた青年からは何の返答も無い。

「はあ、また昼と夜が逆転した生活を送り始めていますね」

そう言いながらさくらは清隆の近くに行き、彼の肩を揺らした。

「起きて下さい、清隆」

「ううん、誰だい、こんな朝早くから」

清隆は伸びをしながら言った。

「何を言っているのですか、清隆。私です、さくらです。あなたに

呼ばれたから来たのですよ」

さくらは呆れながら言った。

「ああ、さくらかい。待ってたよ。村雨と村正のメンテナンス終わ

ったよ。着いて来てくれ」

清隆はそう言いながら椅子から立ち上がり歩き出した。

「メンテナンスで何か以上はありましたか？」

さくらは後ろから着いて行きながら聞いた。

「いや、まったく問題なしだったよ」

「そうですか、それはよかった」

さくらと清隆は隣の部屋に入った。

「村雨、村正君達の主が来たよ」

清隆が言うやいなや、

「主~~~~~!!」

小人型のユニゾンデバイスがさくらに向けて飛んできた。

「遅いです、主！」

「ふふ、すいません村雨、色々用事がありこんな時間になってしまいました、何の以上も無かった様ですね」

さくらは少し微笑みながら言った。

「村正も問題無かったようですね」

そうさくらは机の上に置いてある宝石に言った。

「は、どうやらそのようです」

その宝石もといインタージェントデバイスの村正は言った。

「清隆、助かりました。ありがとうございます」

さくらは清隆に振り返り礼を言った。

「いや、気にする必要ないよ、僕もこんな凄いデバイス触れるだけで嬉しいからね。それに此処にいて研究に没頭出来るのも君のお陰だからね」

清隆はそう言った。

「はあ、天草の表の者、その中でも天才研究者と言われ、重宝されるあなたがこの様な所での仕事を望むとはまったく。助かっているのは確かですが」

さくらは嘆息した。

「まあ力もたいした事のない無駄にプライドの高い奴等に嫌々デバイスを製作するよりも、強くて気の合う奴等や可愛い妹分の為に働いた方がずつといいからね」

清隆は笑いながら言った。

「その可愛い妹分が心配しないようにもっと規則正しい生活をして欲しいですね」

「ははは、もし本当に困ったらまた君に甘えにいかせてもらおうよ」

「私は、あなたの母親ではないのですが」

さくらは呆れた目をしながら言った。

「主」博士とばかり話して酷いです」

村雨が文句を言ってきた。

「はは、あんまりさくらを独占してちゃあいけないね」
そう清隆が言った時だった。

「隊長~~~~~!」

と言って1人の女性が入ってきた。

第8話に続く

設定 2

デバイス設定

村正 インテリジェントデバイス

ミッド式とベルカ式両方の能力を使える。当然カートリッジシステム搭載。また使用時の状況によって1式から8式までの8つの武器に変わる。またそれぞれの武器によりバリアジャケットも変わる。さくららに使ってもらえる事を誇りとしている。

1式 刀型 形状は日本刀 バリアジャケットは黒い着物をまといその上に羽織を羽織っている

2式 双剣型 形状は湾刀型 バリアジャケットは黒い騎士甲冑をまとう

3式 大剣型 身の丈ほどもある十字剣。これを背中に背負う バリアジャケットは聖職衣の装い

4式 槍型 形状は十字槍 バリアジャケットは3式と同じ

5式 弓型 バリアジャケットは1式と同じ

6式 杖型 形状は錫杖の様である バリアジャケットは袈裟を纏ったような装い

7式 拳型 格闘だけでなくバリアジャケットの中に仕込んだ暗器も使う この暗器はどの様な時でも使う事が出来る バリアジャケットは6式と同じ

8式 糸型 目で認識出来ないほどの細い糸に魔力を流し、自在に操る バリアジャケットは6式と同じ

村雨 融合型デバイス

真っ白な髪でラインと同じで具現化時の外見は10歳程度の幼い少

女である。さくらにべつたり。いつもは冷静沈着に振舞っているが、実際はかなりの天然である。単独での魔法戦闘も可能であり、戦闘時にはさくらの背中を守る。ユニゾン時にはさくらの髪が真っ白に染まる。

特務一課について

管理局の地上本部に所属しているが、陸海空関係なく依頼を受けた任務を行う。また聖王教会や評議会も依頼してくる事がある。また依頼された任務が無意味な物であったり、治安に良くないと判断した場合は断れる権限を持っている。舞い込んで来る任務はどれも危険な物である。なので部隊員は全員何かしらの能力が秀でている。また依頼された任務以外にも管理局の人間が不正を行っているか調査し、確証が得られれば、管理局の上層部であっても逮捕する権限がある。部隊構成としては大隊長をトップとし、第1小隊、第3小隊の実行部隊に加え、技術班、医療班、輸送班など多岐にわたってある。

第1小隊班員

隊長 天草さくら 二等空佐 15歳

副隊長 フィリア・クルト(女性) 一等空尉 19歳 装備デバイス 杖型

クロウ・ピア(男性) 二等空尉 30歳 装備デバイス 二丁拳銃型

天草省吾 三等空尉(男性) 13歳 装備デバイス 刀型

セリエ・ル・ルシエ(女性) 三等空尉 19歳 召喚魔

導師(竜召喚) 装備デバイス 拳型

天草忍（女性） 三等空尉 17歳 装備デバイス 短刀型
クリス・ローランド（男性） 准空尉 18歳 装備デバ
イス 狙撃銃型

その他

大隊長 ゲルド・グエル（男性） 45歳 少将

技術班班長 天草清隆（男性） 22歳 二等陸佐

医療班班長 エリス・アスラ（女性） 25歳 二等陸佐

第2小隊隊長 ラエル・ミルト（女性） 21歳 二等空佐

第3小隊隊長 クスト・ゲイル（男性） 29歳 二等陸佐

第8話：隊舎にて 4

「隊長~~~~~!」

その様な声が部屋の外からしてきたと思うと1人の女性が金色の髪を振り乱しながら乱入してきた。

「お化けです~~~~!?!」

村雨がそう叫びながらさくらに抱きついた。

さくらは少し驚いた顔をしながらも村雨をしつかりと受け止めながら乱入してきた女性に呆れた様子で言った。

「フィリア、もう少し落ち着いて行動しなさい」

すると、フィリアと呼ばれた女性は呼吸も絶え絶えに涙目な状態で一気に喋りだした。

「だって、私に黙って隊長1人で本局に行っちゃったじゃないですか!いつもどこかに行く時は私に言って下さいと言ったじゃないですか!」

フィリアと対照的にさくらは落ち着いた様子で対応してきた。

「あなたに言うといつも着いて来ようとするじゃないですか。そうしたら隊の指揮をする人がいないではないですか」

フィリアは深呼吸をしながらも今だ興奮しながら反応してきた。

「当たり前じゃないですか!どこに隊長を狙っている不埒な輩がいるか分からないじゃないですか!隊長可愛いのにそういう事には鈍いんから、すぐに騙されますよ。隊長にとったら男だけではなく女性までも狼にさせてしまふんですよ!隊の事なんてクロウさんに任しておけばいいんです」

「うーん、君もその狼の代表じゃないのかな?」

清隆が苦笑いを浮かべながら村正にぼそりと呟いた。

村正は巻き込まれない様に我関せずの状態を貫いていた。

フィリアはその呟きを無視しさらに続けた。

「まあ百歩譲ったとして管理局に1人で行った事は許しましょう」

(何故上の立場にいるんだ?)

その場にいた者達全てが思った。

「どうして帰って来た事を最初に言ってくれなかったんですか!? 私は大隊長に聞いてやっとならなくて知ったんですよ! それなのに隊長ときたら私より先にその機械変人と村雨の所なんかに行っちゃった!」

(なんか僕の扱い酷いよね)

清隆は誰にも気付かれずにこっそりと涙を拭いた。

さくらが話そうとした時、

「それは仕方の無い事なのですよ!」

そう今までさくらの胸に抱き付いていた村雨が言った。

「私と主は最高の主従関係にあるのですよ。それに比べあなたとマスターは単なる上司と部下。どちらを先に優先するかは誰にでも分かるのですよ!」

村雨は腕組みをして、胸を張りながら言った。言われたフィリアは一瞬固まっていた。だがすぐに復活し負けじと言い返した。

「た、確かにあなたと隊長はデバイスとマスターの関係なので仕方ないかもしれませんが。けど所詮はそこまでです! それ以上発展する可能性はまずありません。それに比べ私には進展の可能性が大いにあります!」

そう言われ村雨は笑っていた顔を歪ませた。フィリアも顔は笑顔だが目は笑っていないかった。

「いや、2人とも君達が考える様な進展はないと思うけど・・・」
様子を見ていた清隆がぼそりと呟いた。

「いい度胸なのですよ、フィリア。そこまで言われては黙ってははいられません。勝負ですよ! 今日こそ決着つけてやるです!」

「望むところです! そちらこそ私に負けて怨まないで下さいよ」
村雨とフィリアはそう言いながら部屋を出て走り去っていった。しまった。

「止めなくて良かったのかい?」

部屋の外を見つめながら清隆はさくらに聞いた。

「あの様になつたら2人は止まりませんから勝手にさせといた方がいいです。2人ともいいストレス解消にもなるでしょうし」
そうさくらは言った。その後少し会話した後さくらは清隆と別れ部屋を後にした。

(クリスの所に行くのは今日は無理ですね。明日にしましょう)
そう思いながらさくらは自室へと戻って行った。

第9話に続く

第9話：任務通達

次の日、第一小隊隊主室には6人の人影があつた。

隊主席に座っているのは小隊長の天草さくら。隣には副隊長のフィリア・クルト。

さくら達の目の前には左からクロウ・ビア、セリエ・ル・ルシエ、天草省吾、クリス・ローランドが並んでいた。それぞれの手には任務に関する資料を持っていた。

「何か任務に関して質問がありますか？」

さくらが聞いた。

するとクロウが一步前に出て言った。

「隊長、これはちよつときつすぎじゃないすつか？俺達だけである広い空港の中からこのレリックとかいうロストログアを見つけないで無理に等しい。大体こういうタイプの任務は特務二課の方が得意じゃないすつか」

他の隊員も言葉にはだしていかないが同じ気持ちだった。

「そうですね、確かにレリックを我々だけで探す、しかも隠密にとするのはきつすぎますし、特務二課の方が得意な任務でしょう。ですが今回この任務が私達にまわってきたのは3つの理由があるからなのです」

さくらは隊員達を見渡しながら言った。

「理由って？」

今度はセリエが聞いてきた。

「1つ目はレリック本体の危険性です」

そう言いながらさくらは1つの映像をだした。

「これはつい最近レリックの回収任務の映像です。本来回収されるはずのレリックの1つは遺跡の中にあつたそうです。ですがその遺跡は跡形も無く吹き飛んでいました。原因はレリックの爆発だと考えられています。これが空港内でおきたとしたら甚大な被害になる

でしょう」

そしてさくらは先程の映像を消し、次の映像をだした。

「これが2つ目の理由です」

そこには機械兵器との戦闘の映像が映し出されていた。

「これはレリックを狙ってきたものだと思われませう。この機械兵器にはAMFが搭載されています」

「機械兵器にAMFが付いてるんすか!？」

クロウが驚いた様子で聞いてきた。

「ええ、これが量産されでもしたら大抵の魔導師にとっては戦う術を失ったも同然ですからね。これが空港に現れたらかなり危険です。ですからもし現れてもすぐに対応でき、尚且つ迅速に敵を排除する事が出来る我々がいた方がいいと大隊長が思われたのでこの任務がまわってきました」

クロウとセリエが納得したのを確認し、さくらが3つ目の理由を言おうとした時、

「この機械兵器と戦っているのって・・・」

と、クリスが映像を睨みながら言った。

「レリック回収の任務を与えられたのはクロノ提督が指揮するアースラです」

「へえ、あの坊主が今では提督か!」

さくらが言いクロウがおもしろそうに言った。

「そして、実際に現地に回収に向かい機械兵器と戦ったのは、高町なのは戦技教導官、フェイト・T・ハラオウン 執務官、八神はやて特別捜査官、あとヴォルケンリッターの面々です」

「・・・」

さくらがそう言い、クリスはますます険しい表情になった。そして他の面々もクリスと闇の書の間係を

知っているのどうしてその様な質問をしたのかを理解した。

「他に質問はありますか、クリス?」

「・・・いいえ」

さくらはクリスの気持ちに気付いていない様に言い、クリスも少しして答えた。

「それでは、3つ目の理由です。これがおそらく最も重要なのでしよう」

「どうしてなの？さく姉」

今度は省吾が聞いた。

「勤務中にその呼び方は止めなさい。何故最も重要かということこの事件には、管理局の上層部が関係している可能性があるからです」

「証拠はあるの？」

セリエが聞いた。

「いいえ、ですがこの事件はどうも裏に何かあるのではないかと大隊長だけではなく私も思っています。もしこれが当たっているとしたらそれこそかなりの問題です。ですのでこの任は誰にも悟られる事なく隠密にやらねばなりません。これだけだと特務二課でもいいのかもしれませんが先の2つの理由と総合すると我々が動くべきであるということになったのです、わかっていただけでしたか？」

全員が納得するのを確認すると、さくらは

「では、これで任務通達は終了です。各員それぞれの仕事に戻って下さい」

と、言った。

それぞれ敬礼して隊主室から出て行った。しかしクリスが退出しようとした時、

「クリス、あなたにはまだ話があるので残って下さい」

そうさくらが言った。

第10話に続く

第10話：復讐

「クリス、あなたには話があるので残りなさい」
さくらが言った。

「どうしたんすか？」

クリスが聞いた。今隊主室にはクリスとさくらの2人だけでとても静かな状況だった。

「先日、本局の廊下でクロノ提督達と出会った時に八神はやてとヴォルケンリッター、そして闇の書の事について後で話をすると聞いたでしょう」

それを聞いてクリスは少し驚いた。あの時言ったのはクリスの行いを止める為のものであり、本当に実行するとは思ってもいなかった。なので、クリス自身も今の今までさくらに言われるまで忘れていた。

「あれ本気だったんすね、けどもう大丈夫っすよ」

クリスは笑いながら言った。

「大丈夫と言う者がヴォルケンリッターや八神はやての戦いを見てあの様に心を乱すのですか？」

そう的確に言われクリスは笑うのを止めた。実際にクリスの心にはまったく整理などついていなかった。なのでさくらにその様に言われ自分の心を隠すのが難しくなったのだ。

「私はあなたではありませんし、また人の心をよむこともできません。ですがあなたの思いを聞く事は出来ます。クリス、今聞いているのはあなたの事だけではないんですよ」

さくらはクリスを見つめながら言った。

「どういう意味っすか？」

「あなたも知つての通り八神はやてやヴォルケンリッターは優秀な管理局員です。よって私達と同じ戦場で協力する事もあるでしょう。その時あなたはなんのためらいも無く敵だけに銃口を向ける事が出

来ますか？もしあなたが八神はやて達に銃口を向けるとしたら私はあなたを斬ります」

そう言われクリスは俯いた。さくらはそのまま話を続けた。

「私も自分の部下を斬るなどという事はお断りです。だからこそ私は今ここであなたの真意を聞かなければなりません」

クリスは俯いたまま黙っていた。やがて少し時間が過ぎクリスは少しずつ話し出した。

「姉貴が目の前で殺された後、俺は闇の書の奴等を殺す為だけに生きていこうと決めました。けど戦えるだけの力がついたと思っただ頃には闇の書事件は解決し、八神はやてとヴォルケンリッターは管理局に入り平和の為に働き始めていました。俺はその姿を偽りで何かを企んでいると考え、特務一課の権限を使って奴等の事を調べました。けど調べれば調べていくほどあいつらの正しさが証明されていた！」

クリスの語調はだんだんと強くなっていった。

「俺はそれこそ狂いそうになった。けど・・それと同時にあいつらの資料を見たせいとかどこかで殺さなくてよかったという安堵があった。けど管理局の廊下で八神はやてに会ってあの時の復讐心が抑えきれないほどに膨れ上がった。俺は思っただけですよ。どうして俺は姉を殺されて辛い思いをしなきゃならなかったのにヴォルケンリッターや八神はやてが幸せそうにしてるのかって！」

そう言った後クリスは黙った。

「では、あなたは撃ちますか？彼女達を」
さくらはそう聞いたがクリスは黙ったままだった。さくらはそのまま続けた。

「あなたの気持ちはわからない訳ではありません。私自身その様な場面にはいくつも立ち会っていますから。ですが、あなたがもし彼女達を殺してしまえば、彼女達が救えたかもしれない命までもあなたが殺してしまうことになりますよ」

クリスはっとした様子でさくらの顔を見た。実際にはやて達は優秀

な管理局職員であり彼女達によって救われてきた命はたくさんあった。その彼女達をクリスが殺すという事はこれから先はやて達が救えるかもしれない命までも殺す事という事になるからだ。

「それで殺された者達の遺族達は殺した者を怨みそのまま負の連鎖は続いていく事になるでしょう」

「確かにそうかもしれないです。けど、それでも・・・！」
クリスは苦しそうに言った。

「そうですね、このような事は理屈ではありませんからね。本当だったらここでもっといい言葉をかけるべきなのでしょうが・・・すみません」

「いや、そんな事！・・・」

「ただ1つだけ言わせてもらってもいいでしょうか？私はあなたが彼女達を殺さない事こそが八神はやてにとって最大の重荷になると思います」

クリスはよく理解出来なかった。

「・・・どういう意味ですか？」

「彼女があなたに殺されずに生き続ける事。それは彼女が自らの人生の全てを贖罪の為に使わなければ

ならないという事。少なくとも八神はやてならそう思うでしょう。

彼女は特にそういう事を気にする方の方ですからね。そして、八神はやてがそう思えば、その守護騎士達もまた自らの罪を一生負っていかなければならなくなるでしょう」

言わば八神はやてとその守護騎士達はこれからの人生全てを償いに捧げなければならないという事であった。

「私は死というものはある意味で苦しみから解放されるものだと時折思うことがあります。八神はやて達を殺すという事は彼女達を罪から解放するという事。だからこそあなたが殺さないという事は彼女達に対する最も重い枷になると私は思います」

ここまで言っただけならは一旦間を置いた。そして少しして再び話し出した。

「罪を犯した者達は等しくその罪を償わなくてはなりません。死とは罪からの逃避にしかありません。死を与えられなければならない者は……」

さくらは一瞬黙った。次に言いたい事を躊躇するように。

「……化け物の様な者達のみですよ……」

そうさくらは儂げに微笑みながら言った。その様子はまるで自らの事を言う様に悲しそうな笑顔であった。

クリスはその意味を聞こうとしたがそのさくらの顔を見て聞くのを止めた。

「少し話がそれましたね。逆にあなたを更に悩ましてしまったかもしれないですね。すみません」

さくらは少し頭を下げて言った。

「いえ、そんな事ないです。けど、もう少し考える時間を与えて欲しいというか……」

「そうですね。私の言った事は心のどこかに留めておいてもらえとありがたいです。あなたの言いたい事もわかりましたし今日のところはもう戻っても構いませんよ。あなた自身で何か決心がついたら言ってみてください」

「……分かりました。失礼します」

そう言ってクリスは隊主室を出た。少し歩いて行くとそこにクロウがいた。

「クロウさん、どうしたんですか？」

「いや、ちよっとおまえに忠告しとこうと思ってな」

クリスはクロウの言っている事の意味が分からなかった。

「どういう事すっか？」

「いや、おまえの過去も知っているし、どういう気持ちでいるのかもある程度分かっているつもりだ。

けどな、忘れるかもしれないから教えといてやるぜ。隊長はおまえよりも4つも年下だ」

「!?!」

クリスマスもさくらが自分よりも年下なのは知っていた。けれども彼女はあまりにも大人びておりその事を忘れさせてしまうほどだった。

「おまえが悩むのも苦しむのもおまえの勝手だ。だがなあその事で隊長に苦しい想いさせんなら俺はおまえを許さないぜ」

その声はとても冷めておりクリスマスはおもわず後ずさった。

「わかったか？」

「・・・はい」

「まあ言いたい事はそんだけだ。それさえなけりゃ隊長に相談しようが構わないぜ。俺や他の奴等でもいい。・・・そんじゃ先に戻ってるぜ」

先程の冷たい口調などは微塵もなくなりクロウは背を向けて歩いて行った。

そしてクリスマスも少しして自分の仕事場所に戻っていった。

第11話に続く

第11話：空港火災

「隊長、こりゃどういう事っすか」

クロウが呆然としながら聞いた。他の隊員達も同じ思いであり聞かれたさくら本人が一番聞きたい質問だった。

その日さくら達第一小隊はゲルドに言われた極秘任務の為に臨海第8空港に来ていた。しかし目的地に到達した時には空港は火の海だった。

「任務を開始する当日にこのような事が起こるなんて少しおかしくないですか、隊長？」

フィリアはさくらに聞いた。さくらもおかしいとは思った。

(任務の内容が外に漏れていた・・・?)

さくらは少し考えた。だが現時点での優先順位を考え隊員達に支持をおくった。

「今は考えている場合ではありません。我々はこれから空港内部に取り残された人達の救助を行います」

「レリックの方はいいの、隊長？」

セリエが聞いてきた。

「ここまで空港全体を巻き込む火災です。レリックの暴走と考えるのが妥当でしょう。なのでレリックの回収を行う事はほぼ不可能だと思います。我々の今の優先事項はレリックでは無く、人命救助です」

そう言ってさくらは隊員達に命令を出し始めた。

「空港内部に入るのは私、省吾、クロウ、セリエの4人です。フィリアとクリスは外で脱出してきた人達の救助を行いなさい。それと貴方達2人にはもう1つ行って欲しい事があります」

さくらはフィリアとクリスの方を向きながら言った。

「何をすれば？」

フィリアが聞いた。

「考えたくはありませんが今起きている火災が故意に行われた可能性もあります。ですので、不審な行動をしている者がいたら、事情聴取又は捕獲をお願いします」

「了解しました」「了解つす」

フリーリアとクリスが頷いた。

「私はどうすればいいんですか、主？」

まだ命令を受けていない村雨が聞いてきた。

「村雨、あなたはフリーリア達とここに残り司令部の通信を傍受し、救助活動の情報を我々に教えて下さい」

「え、普通に私達も司令部に救助に参加する事を伝えて情報をもらえばいいんじゃないのですか？」

村雨は理解しきれずに聞いた。

「今回の私達の任務は極秘に行うはずだったものです。いくら任務自体が失敗だとしてもばれてもいいというわけではありません。なには思いますが我々が今ここにいる事がわかる事で今回の任務自体の内容まで外部に漏れるなどという事はなるべく防ぎたいのです」
そう言いながらさくらは次に他の隊員達の方に向かって言った。

「貴方達も他の救助に参加している方々に所属を聞かれても本局の魔導師だと言って下さい」

「了解！！」

隊員達は全員頷いた。

「それでは、散開！」

さくらの号令と共に全員は自分の任を果たす為に飛んでいった。

（隠密行動が得意な忍がいたら彼女にレリックを優先的に探す様に頼めたのですが）

1人になったさくらは密かにそう思った。だがその忍は現在任務中でこの場にはいなかった。

（まあ、考えても仕方ないですね。それでは私も動きますか）
そうさくらが思っていた時だった。

「つつ！？」

眼帯で覆った左目に軽い痛みがはしった。

(・・・どこかでおかしな魔力の流れが感じられますね)

救助活動の為に現時点で多くの魔法が空港の周辺や内部で使われている。しかし今さくらが感じた魔力の流れはまったく別物だった。そう、まるで人を殺そうとする時の殺気のこもった魔力の流れだった。

(もしかすると本当にこの火災は人為的なものかもしれませんね) そう考えたさくらは魔力の流れを感じた方へと向かって行った。

その頃空港内部

そこには2人の人影が見えた。

1人は高町なのは。そしてもう1人はスバル・ナカジマだった。

なのははスバルを連れ脱出する為魔法で天井を破壊するために魔力の収束を行っていた。スバルはその間なのはによって張られたバリアの中で待機していた。

スバルが見つめる中

「ダイバイン・・・」

なのはがダイバインバスターを撃とうとした時だった。

ガシャーン！！

その音ともにスバルを守っていたバリアが壊れた。

「えっ！？」

なのははその音を聞き振り向いたがその瞬間さらに大変な事態になっている事に気付いた。スバルの後ろにあった大きな柱がスバルに向かって倒れ掛かって来ていたのだ。

(間に合わない！！)

魔法の発動の直前であつたなのはは動くのが遅れてしまった。

「逃げて！！」

なのはは叫んだがその瞬間無常にも柱はスバルのもとに落ちてしまった。

「そんな・・・」

なのはは両膝をついてしゃがみこんだまま呆然としていた。
その時、

「そんな所でしゃがみこんでいる暇はありませんよ、高町教導官」と、倒れた柱のせいで出来た煙の中から声がした。

「えっ？」

なのはが顔を上げて声のした方を向くと

「2週間ぶりというところでしょうか」

そこにはスバルを抱えたさくらが立っていた。

第12話に続く

第12話：救出（前書き）

最近用事が重なり久しぶりの投稿になり、すいませんでした。

第12話：救出

「スバルを救出しに行く少し前」

「今から傍受した通信の情報を皆さんのデバイスに送ります」

外で待機していた村雨から念話が届いてきた。それと同時に村正に空港内部の地図と救助対象者の位置が出ていた。

「主はもう少し行った所に救助対象者の1人がいますが、そちらには高町一等空尉が発見しているので救出に行く必要はないですよ」
村雨はそう言っているがさくらは先程感じた左目の痛みが気になつたままだった。

そしてその痛みは村雨が言っている場所に近づけば近づくほど痛みは強くなっていった。

「いえ、少し気になることがあるのでやはりそちらに向かいます」
「気になることって？」

さくらの答えに念話を聞いていたフィリアが聞いてきた。

「まだそれはわかりません。ですが先程から左目が痛むのです。レリックかもしれないし、もしかしたら…」

「この火災を引き起こした人物かもしれないってことですか？」

「ええ、その可能性もあります」

「それだったら私も主のところ…」

さくらの答えに戦闘になる可能性になる可能性を考え村雨は提案した。

「問題はありません。むこうには高町一等空尉がいるでしょうからもし戦闘になっても大丈夫でしょう。それに村雨にはそちらに残って全体の状況を伝える仕事があるでしょう」

「…わかりました。けど危険だと感じたらすぐに呼んで下さいよ！」
「ええ、わかりました。村雨、フィリア、あなた方も頑張ってくださいね」

「了解です！」 「了解しました」

村雨とフィリアはさくらにそう言って念話を切った。
念話を終了したさくらは目的の場所に向かってスピードを上げて飛んで行った。

銅像に潰される寸前だったスバルは白いバリアジャケットを身に纏った魔導師に助けられ、現在はその魔導師によってはられたバリアの中にいた。

自分を助けてくれた彼女は天井を魔法で破ろうとしていた。スバルはその様子をじっと見つめていた。

「デイベイン……」

スバルの目の前で魔法が発動されようとした瞬間、割れたような音すると共に張られていたバリアが破壊されてしまった。スバルは何が起きたか分からず呆然としていたが後ろから聞こえて来る音に振り向いた。するとそこには自分に倒れ掛かってきている柱があった。逃げようと頭の中で考えても足がすくんで動けない。後ろからかかってくる「逃げて！」という声がどこか遠くの方から聞こえた様気がした。スバルは迫り来る柱が怖くて目を閉じた。その直後、柱が倒れた大きな音が響き渡った。

（私は死んだの？）

そうスバルは思いつくりと目を開けた。するとそこには1人の女性の顔があった。先程助けくれた人とは違い、左側に黒い眼帯をつけた人だった。そして今自分はその人に抱き抱えられている事にも気付いた。

（助かったの？）

そう思った瞬間緊張がほどけてスバルはそのまま気絶してしまった。

（危なかったですね）

さくらは気絶したスバルを抱えながらそう思っていた。

「柱がスバルに倒れ掛かる直前」

救助対象者のいる場所をさしたポイントに到着したさくらは、倒れ掛かっている柱の下にいる少女を見つけた。

「っ！？村雨、八式！」

さくらは一気に飛んでいきそこにいる少女を抱き抱えながらそう言った。すると目に見えないほどの細い糸がさくらと少女の周りを覆っていった。さくら達を覆いきったその糸は倒れかかってきた柱の部分を次々と切り裂いていった。柱が全て倒れきると覆っていた糸が段々と解けていき、そしてそのまま消えていった。最後に糸に覆われていた中にいたさくら達の姿が現れた。周りは煙に包まれ何も見えない状況だったがとりあえず現時点で大きな危険はないとさくらは判断した。

(しかし…)

さくらは少女に怪我が無いかどうか確かめながら考えていた。倒れ掛かってきた柱を見た時に大きな違和感を感じたのだ。

(あれほどの大きさの柱がいくらこの火災の中でもそうそう壊れるはずがない…)

だとすると考えられる可能性は限られてくる。

(そう例えば無理やり誰かの力によって強制的に折られたとか…) だとするならば今この少女がここにいる事は極めて危険である。そう考えたさくらはこの場にいたもう1人の魔導師に声をかけた。

「そんな所でしゃがみこんでいる暇はありませんよ、高町教導官」

そう言われ顔をあげたなのは視界の先には、煙の中から出てきたさくらの姿があった。そこにはさくらに抱かれた少女の姿もあった。

「2週間ぶりというところでしょうか」

さくらはそう言いながらなのはの方へと歩いてきた。

「あ、天草さん…」

状況についていけないのははそうとしか口にだせなかった。

「ええ、憶えていてくれたのですね」

「あ、あのどうしてここに？」

そう聞いてきたなのはにさくらは説明を始めた。この空港にレリックが存在したかもしれない事、この火災や今起きた事故が何者かによつて引き起こされたかもしれないという事を除いた予め考えられていた嘘の情報だが…。

「なるほど、わかりました」

さくらの説明を嘘と知らないのははそれに納得した。

「私はこれから別の救助者の所に向かいます。高町教導官はこの子をお願いできますか？」

そう言いながらさくらはなのはに少女を渡してきた。

「い、いえ私がこちらに残るので、天草さんがこの子を連れて行ってあげて下さい」

なのはは自分が危険なこの場に就いて救助活動を続けようと思っていた。だが、

「今最も優先すべきはこの子の安全の確保です。そう考えると最短ルートでこの場を出るには上の屋根を破って出るのが得策です。先程あなたが行おうとしたように」

そうさくらに言われた。さらにさくらはあの屋根を突き破るだけの砲撃魔法はないという。となると必然的になのはが連れ出すという事になる。なのははあまり納得していなかったが事実なので認めた。「わかりました、ではそちらも気をつけて下さいね」

なのははそう言い今度こそ少女を連れこの場所から去って行った。

「…そろそろ出てきたらどうですか？」

なのは達が外へ出たのを確認したさくらは倒れた柱の更に奥の場所を見ながら言った。そこには誰もいないように見えた。しかし、

「…よく気付きましたね」

そう奥から声がかえってきた。

第13話に続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9794h/>

魔法少女リリカルなのは 神殺しの魔導師

2010年10月22日13時55分発行